
夢詩壺

磯崎愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢詩壺

【著者名】

磯崎愛

ZZ「アーティスト

アーティスト

【あらすじ】

【全年齢・現代恋愛ファンタジー小説・サイトで完結済作品を微妙に改稿して転載】

30代独身OL深町姫香は古道具屋「时任洞」の常連だ。店には読書好きの貌がいて、どんな夢でも見ることができるという「壺」を売っていた。

その壺をあずかってから姫香は奇妙な夢を見るようになり……。本と夢を巡る恋愛ファンタジー。

ほぼ毎日更新ねりしてます

△△△（前書き）

【登場人物】

深町 姫香

ふかまち ひめか

本編主人公。30代独身OL。読書と絵を描くのが好き。

时任 猛

ときとう ぱく

古美術・古道具屋「时任洞」の雇われオーナー。読書好き。本業は「夢売り」。正体は、謎。

浅倉 悟志

あさくら さとし

姫香の大学時代の後輩、アサクラ君。臨時の「时任洞」パートタイ

ム店長で、本業は輸入レコード店店長。

ミズキ（みずき）

浅倉悟志の友人にして雇い人の美青年。輸入レコード店社長で、元

クラブDJ。本名は秘密。

酒井 徳次

さかい とくじ

酒井晃の大叔父。源氏物語の桃園式部卿になつた夢を見る。

酒井 晃

さかい あきら

姫香の元カレ。

失敗した。

こんな日にかぎつてピンヒールのブーツ履いてきちゃつたよ。
二十一半の靴の踵が落ちるほど狭い、手すりのついた急な階段を見あげていつたん立ちどまり、カラオケボックスの派手な螢光看板をちらりと横目にし、気合を入れてカバンを肩にかけなおす。
左手には本の入った紙袋の持ち手が食いこんでいる。

目指すは「时任洞」。古美術・古道具屋だ。

一階に大衆居酒屋、二階にカラオケ、三階には現代アート画廊といふエレベーターもない雑居ビル最上階の四階にそれはある。

「こんばんは」

入り口にかかる藍染の暖簾をおしあげて見えるのは、正面に陣取る階段箪笥だ。

その上にそれぞれ、紫座布団に座つた金色の招き猫、マサカリ擔いだ金太郎さん、ガラスケースに入つた博多人形が置かれている。
これだけ頭身の違うものを同じ高さだといつだけ並べられる店主のセンスがすごい。

長方形の室内はせりあがつた左奥半分に置がしいてあり、和箪笥や鏡台やその他さまざまな家具や雑貨がひろがつてゐる。床には露店の「」ときまとまりのなさで、ひびの入つた七輪やごりんとした臼が転がつてゐた。

右奥正面にはカウンター代わりのテーブルがあり、手前だけヴェトナム風の染付け皿や手提げ籠、箸置きやキャンドルやこまじまと雑貨がのつてゐる。

その後ろ、仕切りの向こうが事務所だ。

まったくもう、お客がきたのに出できやしない。

古美術の部分はどうも、うそくさい。作り付けの棚には箱書きのついた萩茶碗もあるけれど、さつぱりよいものに思えない。その隣

に安手のお題茶碗がばらばらと並べてあるのが艶消しなのだ。じやあ何が田町とかといふと焼き桐の箪笥におさまった古裂とアンティーグ着物だ。

なにを隠そうこれにはまって一年ばかり、月一ペースで通っている。

初釜におよばれしたあと、「茶道具セール」の看板につられたのがはじまりだ。

これで店主が眼鏡の似あう美青年だったなら、私だつてもつと頻繁に来ることだろう。ところが、鳩時計のかけられた仕切りの奥にいるのは、美青年どころか人間でもない。

まあ、ありていにいって、いやもうこのさにはつきりいうけれど、そこにいるのは正真正銘の猿なのだ。

夢枕猿じやないよ。彼なら、即刻『キマイラ』の続きを懇願する。

「あら、いらっしゃい」

ようやく田の前にあらわれたのはおよそ体長一メートル、熱帯地方にいて夢を食べるという奇蹄田バク科の猿。ただし、動物園にいる猿ほど泥っぽくない。

いま特別な洗剤で洗つたばかりというくらいつるピカの、白黒の巨大なマレー猿がのつそりと長い顔をあげていた。

「さつきからずつと、誰に話しかけてるの?」

生意氣に、こんな『テカブツ』なのにめちゃくちゃ可愛い声で話すのだ。

「読者だよ」

「それ、いないと思うよ?」

チチチ、私は舌をならして人差し指をふる。

「いないかどうか確かめる手段は私達にはないの。シュレーティング
ーの猫といつしょでね」

「なにそれ、トリビア？」

「ちがうよ。読者が本を開いて読み始めるまでその中身がどんなも
のなのか、ほんとうのところは誰にも確かめようのないものなの。
書評とか帯の文句に騙されちゃだめよ。本の中身はそのひと自身の
一回」との体験で、けっして同じように繰り返される「」とのない、
再現不可能な貴重な体験をいうの。

本というのは本来、そういうもの

「そつかなあ」

猿が長い口吻を左右にふる。ちよつと、象に似てる。そのまま、
よつこいしょ、と近くの丸椅子に腰掛けた。

いつも不思議なんだけど、座れるんだよね。
その姿をとつくりと眺めながら問いかける。

「読書がいつたい何に似ているか、考えたことがある？」

「なにって

「人生

「はあ？」

今、半田になつたよ。猿のくせに！

「信じてないな

「だつて～」

猿は大きな身をよじつて上目遣いで私を見た。

「アタマ悪いひとに見えるから語尾をのばすなつて言つてるでしょ

「でもお、じつさいあたし、バクだしい」

「そこは馬鹿だよ、バ、カ」

「やだ～、あたしバクだから、ウマシカだけは言われたくないの
に、ひつどお～い

猿は一足立ちになつて長い頤したに両前脚をもつてきて、頭を左右にゆるゆるとふつてみせる。

いれませんが、おやじやつていいのんだ。

ひねこびた三十代独身〇一（昨今では負け犬といふらしい）には何があつても真似できぬ荒業だ。

もつとも大昔の美少女アイドルと違つて、ふんわりカールした髪が揺れたりしないからただただ不気味なだけなんだけどね。

「それで、今日の呼び出しあなに?」

切り替えた。

月末の呼び出しは珍しい。なにか出物でもあつたのかしら。
友達が吉祥寺でやつてある古着屋さんに、この布地や小物を卸している。

月に儲けは映画一本分もないアルバイトだ。去年一年の収支でいふと青田の鶴首（ギギ）一万円）を戻すだけでいいが！

でもまあ、自分の選んだ布地がお洋服や可愛い小物になつて買わ
れていくのはうれしいものだ。だから飽きもせずにぶんの買い物だ
けでなくちゃんとこりずに買い付けもする。

猿もすぐそうした私の気持ちを了解して、黒檀のテーブルにのった小さな壺を口吻でさししめした。人間でいえば、あごでしゃくつたというところだろうか。

「これが？」

いつものアルバイトじゃないと気づいて眉をひそめた。

これは商売のほうだ。

つまり摸の本業、夢売りの仕事。

「むし壺よ。あたしの商売道具。売り物ね」

「ムシ壺？」

どんな夢でも見られるそうだけど、なんだかそれはひどく淫らな気がして丁重にお断り申し上げていた。だつて、そんなのなんだかいやらしいじゃない？

「安くしとくわよ。でも、転売はしないでね。人死にが出るといけないから」

「そんな物騒な代物いらないよ」

聞きなれない言葉を耳にして怖氣で口にすると、猿はさうつといたえた。

「貴女なら平氣。というより、それを持つてるとあたしも引き摺られていきそだだから、貴女を信用して預けたいの」

信用なんて言葉が飛び出すとは驚きだ。これは、困ったな。すぐそばの藁張りの椅子に腰をおろす。

「何があつた？」

正攻法で問いただすと猿はふつと皮肉っぽく笑う。猿も笑う。犬が笑うよりはずつと人間らしく。

「ちがうるじや、目に見えるものしか信じないひとが多くなつて商売あがつたりなのよ。雇われオーナーは辛いわ。ここのお家賃払うのも一苦労よ」

時代劇なら、こめかみに膏薬をはつた女将が煙管から紫煙をはいて空いている手でぽんぽんと肩をたたきそうな素振りだった。

年末に自分への「」褒美がわりに買った南部鉄瓶の代金三万円の支払いがまだだつたことを思い出し、あわててお財布をとり出した。

「今日は一万円もつてきただけだけど、来月のお給料日には二万円払うから」

一万円札を受け取りながら猿が呆れたようにいった。

「それじゃ月賦の意味ないじゃない」

「月賦つて、懐かしいひびきだね」

猿はそれから、先ほどとはかわって可愛らしく笑つてから口にした。

「うつし世は夢 夜の夢こそまこと」

「乱歩」

「」名答。もつていつて

猿が壺を右脚でこちらのほうにすすめた。

私達は本読み友達なのだ。お互に本を貸し借りしてああだこうだいう仲で、たまに、こいつら遊びをする。

タイトルと作者名だつたり名台詞や冒頭文だつたり。

マイクル・クライトンの『ジュラシック・パーク』をわたすとキアラン・カーソンの『琥珀捕り』が返ってきて、ジユール・ヴェルヌの『海底二万里』と『八十日間世界一周』を「ご主人様と下僕萌え小説」だから腐女子視点で読んでみてと貸すと、ピエールが主人公のエドワールに頑固にムツシューって呼び続けるバスカル・キニヤールの『シャンボールの階段』のほうが「萌え」じゃない、などと押しつけられたりしてお互いに好き勝手に盛り上がり、おバカな読みをしあつてゆうゆうと遊べたのだ。

けれど今回はちょっと、趣旨が違うんじゃないのかな。

「いぐら?」

これが純然たる「売り物」だと知っている私はまつといに値段をたずねた。けれど、

「今のが代金替わり。それから、あたしはしばらく店を空けるから」
問いかけに、ひらりと身をかわすようなさりげなさでこたえられてしまつた。あいかわらず、草食動物らしくない身のこなしだ。動物園でみたバクつて生き物は、もっと鈍重なかんじだつたけどなあ。
「旅行でもいくの?」

ぼんやりと、僕が踊り子号に乗つて伊豆の温泉に入つたりするところを思い浮かべていた。JRのSunicaのペンギンには負けるけど、絵的にはすごく可愛いと思う。それなのに、そうした私のゆるゆるな想像に水をさすかのよつなこたえが返つってきた。

「まさか。ちょっと身を隠してゐるよ」
身を隠す、ですつて? なにそれ、すごく怪しいじゃない。

「このせい?」

壺に触れるのがいやな感じがしてたずねるとその問いかけを無視して、鉄瓶の分の領収書いり、などときいてきた。「こまかされたようだけど、自宅用だからいらないとこたえて、拝見スタイルでテープルに手をつきつつ伏せるようにして壺を見た。

とくにこれといって変わつた様子もない、素焼きの壺のようだ。
珍しいのは蓋が茶壺のように和紙の反古紙でしつかり封をされていることだ。

でも、よく見ると、なんといつか匂いがない。

モノにはその所在を示す気配みたいなものが当然あるはずなのに、それが見えない。景色がない。文字通り釉の有無じゃなくて、本来ならあつてしかるべきそのもののもつ「背景」がないのだ。

遺跡から出てきて考古学博物館に記号番号付で納められててもお

かしくないし南仏でリボンをかけられポプリを入れて売られてても
変じやない。

白麁するけど、物を見るのは慣れてるの。私は絵をかくひとだか
ら。

顔をあげて振り返ると、後ろから猿がいった。

「今までとモノが違うのよ。なかに銀河系まるまる入ってるって言
われても驚かないくらい異質なの」

「それ、とつてもアヤシイ感じよ?」

じぶんでも、ちょっとだけ声が上擦ったような気がした。

「あのね、怪しいものが怖くなったらおしまいよ。だいたい、
しゃべる猿がいる店に長居できるんだから今さらでしょ」

「命は惜しいわ」

一瞬の間にあとに、猿がけじめをつけた。

「そうね。じゃあ、一月たつたら返してもう一つ。たぶん、その頃に
はこつちもどうにかなつてると思つから。じゃあ今その封を切つて
「待つて。使わない」

「それは、無理よ」

猿が、心底呆れたような顔でいった。

「無理でも何でも、私は夢を買わないから」

「封を開けないなら、夢を『コントロール』できないわ」

「コントロール？」

夢くらい、無意識でもなんでもわけのわからない何かに任すよ。だつてそんな、夢なんでものまでも、じぶんの自由にしたいなんて私には到底しんじられない振る舞いだ。

そう思ったのが通じたのか、猿が器用に肩をすくめた。

「変わってるわね。夢くらい自分の自由にしたいっていうひとが多いのに」

「私はイヤなの」

思つたよりずっとときつい調子になつてしまつた。夢売りは猿の本業なのに、それを私は全面的に否定してしまつている。

猿がまだ何か言いたそうなそぶりを見せたので、

「とにかく、預かるから。任せて」

そう、強引に言い切つて壺を紙袋にしまい、わざと話題を変えた。申し訳ないけど、嫌な雰囲気のままではいたくなかった。

「それよりこれ、すごく面白かった」

久世光彦のかいた『一九三四年冬 亂歩』。

カバンの仕切りポケットから角が折れないように紙袋に包んで入ってきた文庫本をとりだした。

久世さんの本はそこはかとない色気が素敵だ。そして乱歩でさえ渝しんで読み耽りそうな作中話『梶子姫』がたまらない。

「貴女が好きそうだと思ったのよ」

うんうんと何度も深くうなずくと、猿はちょっと自慢げに微笑んで本を受け取つた。私はその笑顔がとても嬉しくて、不思議にそれがじぶんの手柄でもあるかのよつた気持ちになりながらお礼をいう。

「こつも、どうもありがと」

「 」

猿が深々と頭をさげた。私も踵をそろえ手を重ねて頭をさげた。
下でいったん止まり、それからゆっくりと上半身をあげた。

お辞儀のコツは、下げる速度より上げるときやや遅くすること。
貴女のお辞儀は見応えがするとウケてくれて以来、猿にはなおざ
りにしないことをしている。そんなことくらいで猿が喜んでくれる
ならいくらでもする。

そして猿が紙袋の中身に視線をくれておもむろに問う。

「 今日のブツはなに？」

その問いに、ダン・シモンズの『ハイベリオン』シリーズを掲げ
てみせた。

文庫落ちするまで待つて大人買い。単行本は全四巻一巻組みぎつ
しりの分厚い凶器本。枕になるどころのはなしじゃないくらいの重
さである。文庫にして全8巻の超長編になる。

あまりに大部で気軽にすすめられないのが難だけど、これがまた
本当にものすごく面白いんだ。そして本好きの猿ならばどんなに長
かろうが面白ければ大丈夫と喜び勇んで運んできた。これ、全部と
なると文庫本だってそうとう重いのよ。

「なんで貴女の持つてくれる小説はいつもそつぱいわけ?」

「だって、長いほうが好きなんだもん」

わたしは悪びれずにそう言いかえす。

「こないだ『神曲』を読まされたばっかりなのに。その前も五冊続

きのSFで」

「『銀河ヒッチハイク・ガイド』。でも、面白かったっていつたじ
やない」

「それは否定しないけどお

西欧の古典中の古典、ダンテの『神曲』はSFだら、というのが
私達ふたりの見解だ。

それにもしても、美女は早死にせねばならぬと、いうフイクションに
おける撃は、かのダンテ・アリギエーリ様の嘘偽りない厳しい現実
から始まつたわけじゃないだらうけど、解せない。

世界中の神話伝説の類はどうしてみんな、女が冥界にくだりちゃ
うのかなあ。

男が死んで、女だけ助かるつていうんじゃ まずいのかしら。

映画『タイタニック』はその点、えらかっただかも。

かといって、愛する女性を守るために死にます、とかいうのも興
醒めなのだ。

さいしょから戦うなよ、といいたい。

「じゃあ、次にくるときはアルフォンス・ドーデかモーパッサンの
短編集もつてくる。こないだ読み返したら心洗われるような気持ち
になつてね」

「新刊はないの? 小説はノベルつていうくらいだから新しくなく
つちや」

ハートマークがつきそつた勢いでうきつわと宣言されても困る。
猿のいうことはもつともだけどそつそつ眞つてはられないし、新

刊なら必ず新奇かつていうとそんなこともないじゃん。

「さいきん、本屋さんには寄らないの」

お金を貯めて『ボッティチエッリ全作品集（六万四千円税別）』を買おうと思ってるから近づかない。行けば、色んな本が欲しくなるんだもん。いくらお金があつたって足らないよ。

美術書でいいんなら、と私が口を開きかけると、

「あんまり専門的なのはやめて。貴女の話を聞いたほうが面白いから」

釘をさされた。

『ダ・ヴィンチ・コード』を読んだあと、僕が小説的に美味しい、ヴェルヌはもちろん、ウンベルト・エーハーの『フーゴーの振り子』、またはコリン・wilsonの『賢者の石』という方面にすすむかと思えば陰謀史観やクトゥルフ物はもうけっこつと美術史へと意欲をみせた。

ではと意氣込み、仕切りなおしでレオナルドが登場する小説を列挙した。

そのまま西洋絵画オタクとしては『ダ・ヴィンチ・コード』の謎解きよろしく、ブッサンの絵を見て、ぜひともフランスアカデミーの成立起源まで辿りたかったのだ。

しかしながら、私の「計画」の前に大きな壁がたちふさがる。

そもそも「ネオ・プラトニズムってなに」については。

それを説明しようとすると、どこからどう話せばいいかわからぬ。西欧思想史のなかでもかなり特異な立ち位置にあるはずのものだし、わたしは重要だと思うけどたぶん、わかりやすい概説本の類はそんなに出ていない。

ぱっとわかりやすくていいえば、「プラトニック・ラブ」という言葉が生まれた思想だ。

でも、本来は、「精神的恋愛」って意味とは違うんだよね。

それはともかく、そのことばのもととなる哲学者プラトン全集は拾い読みだし、キリスト教公会議の歴史やら教会分裂、コンスタンティノープル陥落等など、私の手に負えなかつた。

負えないから、フランスの碩学アンドレ・シャステルの『ルネサンス精神の深層 フィチーノと芸術』という本を貸したのに、読んだらかえつてわからなくなつたらし。

なんでギリシャ人のプラトンとキリスト教が一緒になるのつていう至極真つ当な質問に、私は謙を納得させられるようにこたえられなかつた。

もちろん、百科事典やらウイキペディアあたりにのつてることをちゃんと述べたつもりだったんだけど、全然、通じなかつた。

まあそうだよね。

自分でも正直、ナゾだなあつて思つてゐるんだもん。

歴史的な経緯や事実はおえるけど、本当の意味でのナゼつてわかんないよね。

だからじょうがなくて、ボッティチエリの『春』と『ヴィーナスの誕生』、それから『神曲』の挿絵について、ネオ・プラトニズムの影響があるんじゃないかつて思われるなどを語つてきかせたら、妙に感心された。

すゞくウケタのだ。

「私の話でいいの？」

「貴女の話だから面白いんじゃない」

真顔で口にされると、正直、照れる。いつもこのを面映い、とうのかもしけない。だって、ほっぺが熱くなる。

猿が本の表紙を見ながらいった。

「……ほんとは、小説じゃなくて絵のことが話したかったんじゃないの？」

返答に困り、うつむいている猿の長い顔をじっと見た。

「あたしも、貴女みたいに絵をかけるとよかつたんだけどねえ」

「かけばいいじゃん」

かるくいなすと、猿はひどくおおげさに首をふった。

「だめだめ。まったく、ぜんぜん、絵心つてものがないからダメ」

そこまでいわれてしまつと返す言葉がない。だから話をもとにもどした。

「でもさ、絵について語るなんて無謀だと思わない？」

すると猿が胸をはるよつにしてこたえた。

「それをいうなら、そもそもなにかについて語るつてこと 자체、無謀というか野望じゃないの？」

野望といわれると、ちょっとかっこいい。

ただ一枚の絵を理解するのにさえ人類史を知ることなしには不可能と感じるようになつた、と『薔薇のイコノロジー』で書いた若桑みどり先生の言葉くらい、私を納得させ、怯えさせ、鼓舞する言葉はない。

それはすぐ正直な、うそのない、掛け値なしの真実の告白だと思う。

読書中になかなか、そういう声を聞けるものじゃない。

みんな、わかつたようなことを言いたがるものだ。

昔から、「物語る」ということが気になる。

それはもっぱら文字のことじゃなくて視覚芸術についてのほうだけ、絵に「おはなし」がどうやってかかれているのかが気になる。場所、時系列、登場人物の姿かたち、動き、感情表現、などなど。なにかを読みたくなつてしまつというか、読まされているというか……。

絵のなかにかれている「おはなし」を理解しようとすると本を読まないとならない。

けれど逆に、いつたん絵として流通してしまつた「おはなし」がまた今度、「おはなし」そのものに立ち返つていく。

そういう連鎖の輪に触れてしまつと、いくら本を読んでも絵をみても、まだまだ足りないと思つてしまつ。

理解なんて不可能だとわかつていても、やめられない。
とまらない。

「話の前提条件として、僕と私が『同じ本』を読んだつてことはまあいちおつ信用できるじゃない?」

本は印刷技術のおかげでとりあえず落丁本みたいなものを抜いては、今現在は信用できるテキストがあるような気がするつていうか

「写本だと、写し間違いなんかありそうね」

「そう。一応、流通してる本の場合は版を確認できれば、とりあえず『同じ』ものを見ているっていう信頼感がある。

けど絵はね、現物にあたる以外、本当にもう、どうしようもないの。フレスコ画なんかまず簡単に動かせないし、とりはすしてもダメなのよ。その場所に行つて見ないとわからないことがあるから。なにより、人間の目くらい信用のおけないものはないもの」

「バルトルシャイティス？」

深く、ふかく、何度もうなずいた。

『アベラシオン 形態を巡る四つの伝説』。錯視、目の迷いのこと。今まで貸した美術書関係で僕にいちばん評判がよかつたのがユルギス・バルトルシャイティスだ。滝澤龍彦の偏愛する、リトアニア生まれの美術史家。フランスの美術史の重鎮アンリ・フォションの娘婿で、中世ロマネスク美術を万華鏡のように見せてくれる面白い研究者だ。その人生はなんだか不思議に満ちていて、僕が、誰かこのひとのことを小説に書けばいいのに、とまで言つていた。

ほんとにね。

それからまた、紅茶を飲みながらこの一月の間に読んだ本の話をして八時をまわったところで僕から遠慮がちに声がかかった。

閉店時間だ。

私はよほど、驚いた顔をしたらしい。

「ごめんなさい。悪いわね」

ひどく申し訳なさそうに、猿が謝った。

帰りをうながされたことは今まで一度もなかつた。

前は十一時になろうと、ふたりきりで話し続けていたんだから。「代わりの人のために色々整理しとかないとならないのね」

そりゃあそудだ。

私も謝った。でも、さつきみたいに嫌な感じにはならなかつた。お互い仕事のある大人だし、そういう了解がちゃんとあつた。ソーサーのない半端もののノリタケとウェッジウッドのカップをそのままにして立ち上がる。

猿はほんとに自分でなんでもやりたいひと。

自分がお客様の場合の「そのまでいいから」の見分け方はなかなか難しい。

洗い物はすみからすみまで自分でしたいタイプなのか他人に任せても平気なのか、こまめにしたいのかまとめてさあと腕まくりしてやるタイプなのか、拭いてちゃんと棚に收めないと気がすまないのが洗い籠に置いて乾燥するのを待つほうなのかとか。

まあでも、猿と私がそういうことに一々緊張してしまつ時間はとうに過ぎていい。

猿は紅い飲み物が好き。私は白い飲み物が好き。

紅茶は絶対ストレートという猿と、ワインは白だよ絶対という私と、それでお互い楽しくやつている。

別れはいつも通り。扉まで、猿が見送ってくれる。手をふつて、またねといふ。

またね。

じゃあ、またね。

扉をふさぐくらい大きな猿が、何故だかすぐ頼りなく見えた。薄っぺらぐ、揺らいでいた。それは猿がバクに見えると口にした時以来の、奇妙な見え方だ。

あれは出会つてから一年もすぎたころ、私達はもうすっかりお客と店主というより読書仲間になつていた。

アンドレ・マルローの『風狂王国』を貸したあとイタロ・カルヴィーノの『マルコ・ポーロの見えない都市』が返ってきて、瀧澤好きだという猿に『高丘親王航海記』を枕に、おそるおそる切り出した。

その瞬間、猿の巨体がひらたく瀧れてこの世界に刻み込まれたようを感じた。

輪郭線が際立つて、白黒の陰影がそこにあらわれた。

それこそルネサンス時代の天才彫刻家ドナテッロの浅浮き彫りみたいだった。

実際はほんのわずかしか高低差がない彫りなのにびっくりするくらいの奥行きが出現して、猿が遠いところにいるのかすぐ近くのかわからなくなつた。

田を凝らしてそれを眺めていると、猿は、なんで今まで黙つてゐわけ、もう一年もたつてゐに、今頃いわなくともいいじゃない、と甲高い声でこちらを責めた。

私はなんといつていいかわからなくて、バルトルシャイティスの『幻想の中世』をさしだした。

猿は表紙を見てすぐ表情を変えた。ついでに元に戻つていた。あ、これ読みたかったのよ、といつてそそくせと受け取つた。無言のまま様子をうかがつていたら、さすがにばつが悪かつたらしく、そういう秘密を打ち明けるときはもうちょっと気をつかつてよ、とうつむいた。

ひむらが謝る番なのかと微妙に納得がいかないような気がしながらも謝罪した。

あやまつたら、意外と気持ちが落ち着いた。

やつぱり私が悪かつたかもしれないと反省したところで、猿が吐息をついた。

「ごめんね。びっくりしたの。ほんと、ごめんね。

そう、かわいらしい小さな声がいった。大きな猿が、すこく小さく見えた。

私は本当に悪いことをしたと思い、もう一度と猿を驚かせないようにしておと誓つた。

本当はいろいろ聞きたいこともあつたし（なにしろしゃべる猿だもの）、ひとりになると疑問が胸に渦巻くことばかりだつたけれど（気が狂つたかとか、妖怪か宇宙人かとか）、それは無理やりに押し込めた。

初めて会つたときからいつも猿は本を読んでいた。

あるときなんの気なしに、それ面白いですかと尋ねたところ、よかつたら貸しますよ、と言われたのがダンセイ一卿の『最後の夢の物語』だった。

夢、か。

猿を守りたかつたから壺を受け取つたくせに、軽くなつたはずの

紙袋が妙に重く感じて足をとめた。本を貸してもらえたかったことに気がついたのは、一階と二階の踊り場まできたときだつた。

下から足音が聞こえたので立ち止ると、看板を抱えた小柄な男のひとに、すみません、どうぞ、と逆に譲られた。

一度だけのぞいたことがある二階の画廊のひとだ。上の時任洞によく来るんですよと話したことがあるのに、こちらを覚えていないようだつた。

あのとき、このひとは猿を時任をと呼んでいたから知り合つてことだ。

猿についてみてくなつた。

喉元まで出かかった言葉の気配を察してか、そのひとは立ち止まつたままの私を不思議そうに見あげた。

私は「うまく」とばを見つけられなくて、質問をのみじんじまかした。

「あ、すみません。 わよひなら」

「あ、どうもありがと。 わよひなら、お氣をつけて」
自分でもこわいくらいこの早足でその横をすりぬけて、階段をかけおりた。

きつと、変なお客だと思われたにちがいない。

私は壷のはいった紙袋を胸に抱えるように持ち直し、自分でも呆れるほど大きなため息をついてそこを後にしてた。

「夜の夢にそまこと」とは、よく言つたものだと思ひながら。

（一月一日）

一月の巴里の寂しさを、寒さを、その侘しさを君は想像できるだろうか……。

小さく吐息をついてペンを置き、海を隔てたはるか遠くの東京に残してきた恋人、鏡子を思つ。

常によく見る夢ながら、その夢のなかの鏡子は美しい。ある冬のパーティーの一幕。

彼女は踊り場に集う人の群れに紛れ、一ちらに背を向けて立つている。雪よりも白い背中をみせた真紅のドレス。まるで人魚姫のような美しいそれを彼女は堂々と着こなしている。

僕には彼らの話す言葉も室内樂のゆるやかな旋律もなにも、聞こえていない。僕に聞こえるのはただ、鏡子の声だけ。

その軽やかな、子供のように悪戯っぽい、鳩の鳴き声に似た、喉奥でくぐもらせん独特の笑い声だけが僕の耳をうしづけ、この心臓を高鳴らせる。

鏡子が大理石でできた階段の手すりにやわらかく、まるで触れることをためらうよつとそぶりで手をのせ、僕がそこに到着した気配に気づいて身をくねらせて顔をかたむける。

すると、高窓に嵌められたステンドグラスを通して降りそそぐ陽光が、彼女のうえに明るく艶やかで不思議な文様を描く。その魔術の儀式めいた不思議な光景に見蕩れ、僕は息せき切つて階段をかけあがる。ところが、急に足下が崩れ、奈落の淵に落とされて夢はそこで終わってしまう。

落ちた衝撃に肩を揺らして目をさませば、僕は独り、凍えそうに寒い冬の夜に置き去りにされ、足が無様に震えて引き攣つていると、いうわけだ。

ああ、鏡子。

鏡子、誰よりも恋しいひと。愛しい僕の恋人。美しいひと。
君に会いたい。

こんなさびしいところに来るのはなかつた。ましてたつた独り
でなんて。

どうか手紙をください。このままでは凍えそうです。
愛しています。

最後に、小さく書き足しておいた。

（一月十四日）

鏡子から、まだ返事は来ない。

今日はなんでも異教のお祭りのひとつで、恋人同士が互いに贈り
物をしあつ日だそうだ。あいにく持ち合わせが少なく、本場のクチ
ユリエで鏡子に何かを拵えてやることはできない。

とはいって、僕は鏡子の恋人で画家の卵だ。

僕にできることは、愛しいひとの絵姿をかいて贈り物として届け
ることくらいだろう。

ところが、どうしたことが、画帳にむかつてもこの左手はほんの
すこしも思うようには動かなかつた。

察するに、彼女の美しさを描きとることの困難を、いま僕はしみ
じみと心ゆくままに味わつているのかもしれない。

僕のただひとりの恋人であり、美神でもある鏡子。
会いたい。

（一月十五日）

まだ絵はかけない。あまりにも寒く、今日はカフェでショコラを飲む。身体が温まる。

（一月十七日）

おかしい。先月からもずっと手紙が来ない。何かあつたのだろうか。

鏡子に限って心変わりなどないとは思つが、鏡子は美しい、心配だ。

（一月十九日）

いぐど描いても、鏡子の顔に似ていない。あの愛らしさ、コケットな魅力、そういうものが少しも描けていない。

才能のなさを思い知る。
悔しい。

（一月二十一日）

記憶というのは不思議なもので、胸に確かに刻みつけたと思つものほど危ういものではなく、正直なところ、僕はもうまったく彼女の顔を思い描けなかつた。

いやしくも画家を自指してこの街に来たといつて、なんということだらう。

そのかわりといつてはなんだが、鏡子の着ていたドレスの襟を飾るカメオの女性の横顔、そのなんともいえず優美な（）の線や、彼女の手にしていたオルゴオルの蓋に刻まれた薔薇の花弁のようすや、はたまた紅茶を飲むために用意された角砂糖をのせる銀のスプーンの柄にある英國風の獅子の紋章 そうしたものは今も手にとつて見なくともはつきりと思い出し、それをためしに画帳のうえに描き写すことができるのだった。

それだけではなく、シャンデリアのしたで揺れるダイアモンドの耳飾りの煌めき、彼女の手をつつむ子羊の革でできた馨しい手袋のステッチが描く曲線、黒銀の狐のやわらかく豪奢なマフの手触り、巴里のクチュリエ仕立てのドレスとともに生地の絹の靴を飾るリボンの光沢、そうしたものも描き出すことができた。

初めて会ったときに着ていた、扇面を華麗にあしらつた紫縮緬の大振袖。刺繡された桜模様の半襟。胸高に締めた帯と紅い扱き。洋風の、がま口のついたビーズのバッグ。蒔絵の髪飾りの模様は流水で、房のついた薄い桃色のビロードのショールを肩にかけていたはずだ。僕の画帳には今、物ばかりが幾つも幾つも拡げられている。まるで、鏡子の衣装箪笥がそのままこの紙のなかに納まっているみたいだ！

それなのに、鏡子。

鏡子の姿がどうしても思い出せない。

背は低かつただろうか、高かつただろうか。色は白かつただろうか、それとも日に焼けていただろうか。おかしい。

僕はたしかに鏡子の婚約者だったはずだ。

手紙が来ない。

愛想をつかされたのだろうか。

僕が勝手に旅にしてしまったから。

鏡子、会いたい。

「一月一十三日……ひよひよおと、待つた！」

私はベッドから飛び起きた。

「なんだこれ！？　ダメでしょ、これじゃ。こんな変な夢ばかり見させられたら気が狂うつ。こんなのはぜんぜん望んでないつて、私は画家じゃなくて、深町姫香なんだつてばー！」

これで二十日間以上、この調子だ。

しようがない。ちかくのファミレスにでも逃げよう。寝てしまつと起こしてくれるファミレスしか、行き場はない。

今日とこりう今日は眠つたら狂い死ぬ。

徹夜は三十の大台をこえるとキツイといふのに、なにが貴女なら平気、だよ？

嘘吐きめ。封を開けてないのに、いや、開けてないからか、ん？

私つてば開けてない場合の話しひを聞いてなかつたじやん。

それにして、こんなものやつぱり受け取るんじやなかつた。

こんなものつき返して……つて、でも、そしたら摸はどうなるの

？

ダメだめ！返しちゃダメ。

でも、じゃあどうすればいいんだろう？

その夕方、請求書の切手を貼りながらゆつくりと考えた。

今日は来客も少なくて週末なのにバタバタしないですんだ。

応接室においてのお客様は今夜宿泊予定で金沢からお越しのお取引先様だから、このまま接待先に車をまわせばいい手筈。

飲む前にあんまりお腹をたぱたぱにしてしまつては申し訳ないからお茶を差し替える必要はなし。お店に連絡は入れてあるしタクシ一は外に出ればすぐ拾えるし、お土産の手配もしてあるし問題ない。企画御提案書もさつき全部、もれなくお渡し済み。

応接室のお片づけ＆お掃除は、週明けでいいや。ガラステーブルは手垢がつくからクリーナーで拭かないとならないけど、マメな社員が多いとはいえますがにそこまでやつてくれない。早くテーブル買い換えてほしい。

今の勤めは、小さなコンサルタント会社だ。

「コンサル〇ー」というのは一度やつてみたい憧れの職種だと思つて
いたのだが、実情はただの零細企業の事務員さんだった。

京都の創業二百年をこす老舗呉服問屋の次男坊である社長が外資
系製薬会社を辞めて呉服屋さんをお客様にして始めた会社で、女性
社員は私しかいないつて言つただけでそのこじらんまりさがわかるか
しら？

今朝は早く出社したから余裕があつた。

本当は昨日までに出したかつた請求書をようやく終わらせられて
ほつとする。

だつて五組も打ち合わせのお客様がこられて伝票入力なんとして
る時間はなかつたんだもの。

世の中には一十日締めというのが存在して、なぜかそれは十日や
月末締めによつすこしだけ偉そうで、月末にすべてを締めるとき同様
の緊張をこぢらに強いるのだ。

でも、請求書をつくるのは支払い書をつくるよりなんとなくうれ
しい。こうじうのをゲンキンというのかも。これで世の中がうまく
回るという気がする。

そうだ。

やつぱり絶対に返すのはダメだ。

でも、話しくらいもつとちゃんと聞かないといけない。取扱説明
書くらいもらつておかなきや。大人なんだから。

タイムカードの表示は五時五十一分だ。早く来た甲斐があつた。
角のポストの集配がくるのが五十五分。間に合つね。切手を貼つた
請求書の束をもつて、さあ、これをポストに入れてから行くわよ。

「こりひしゃー」時任洞の暖簾をくぐると、男のひとの声がした。しゃべりとして立ち止まるとき、そのひとはスボーツ新聞から顔をあげてひじらを描いた。

「深町センパイ？」

「アサクラ君？」

どうして、とこう言葉が双方からもれた。それから、ふたりして笑いあつた。

「北海道にいるんじゃなかつたの？」

「そんなの、卒業してすぐのことつすよ」

「じゃあ、ずっと東京だつたの？」

「まあとにかく座つて、お茶でもびいひですか。まあお茶をここでお茶を出せつていわれてたんで」

そうか。今、彼はここにアルバイト（パートか？）なのだ。

それにしても、貌も嵩高くておかしかつたけど、長髪に革ジャン、スキニーなブラックジーンズに鉢付ベルトと全身カラースのように黒いアサクラ君も、この空間にマッチする。

でも、妙になごんでるけどね。

あいかわらず、足、ほつそいなあ。隣立つのいやだつたんだよねえ。

茶托を忘れて仕切りの奥に取りに戻る後姿だけ見ると、あの頃とそつ変わらない。

ぎょろっとした大きな目は昔どおりで、ちゅうと頬がこけた気がするせいか前よりもさらに濃い系だ。

あの髪の長さだとどうあえず前の仕事もサラリーマンじやがないなと検討をつける。

さて、ひとやまの見かけを判断するとこうひとは相手も同じよう

にしているつてことだ。

「アサクラ君、といつことで、頼むついでひとつ、ぶちかましてくれていよいよ」

「センパイ?」

「遠慮はいらないから。老けたでも、まだ結婚していないのかなでも、かまわないからね」

「いえ、あの、オレはですねえ」

「頁数すくないから、言わないんなら本題にはこいつじゃうか

「はあ、望むところです」

望まれたようなので、続けよつ。

いや、待つた。

これだけは最低限、確認しておかないとならないことがある。

「アサクラ君は、バ……时任さんを知ってるの?」

「オレ、オーナーも前の人も直接会つたことないんですよ。このバイトも友達からの紹介で」

ということは、摸がバクだと知らずにいて、ましてや夢売りだと知らないと思つたほうがいい。

「そう。じゃあ、まあいいや。といふで、アサクラ君は今までどうしてたの?」

そこで彼はきゅうつに立ちあがる。

「センパイ、夕飯まだでしょ? 寿司どんぐり、こつしょに食べてきませんか。さつき景気付けに友達からピール半ダース貰つたし」「なに、こきなり。贅沢ねえ」

そういうと、彼は派手な割引券をひらひらと指の間で揺らした。「どこでもらつたの、それ?」

「ポストに入つてたんですよ。期限今日までなんで使つちやおうと思つて。給料日前だけたまにはオレが奢つちやいますよ」

変わらないなあ、と笑う。

すると彼は受話器を肩にはさんで振り返り、十年ちょっとじややそうう人間変わりませんつて、とこたえた。

深町姫香。

一目でわかつた。

そして、相手も自分のことを覚えていてくれたことが心底うれしかつた。

出会ったきっかけは学園祭だ。

入部してすぐ、実行委員として各部活ひとりずつスケープゴートのように新入生がかりだされる。軽音楽部だった浅倉は部長の酒井に命じられて委員になり、くじ引きで施設管理局長の深町の下に配属された。

もともと中庭の舞台で演奏する軽音楽部は自分たちの使い勝手のためにこのポジションを取りたかったらしい。くじ引きから戻つてくるなり酒井にほめられたものだが、浅倉はもうその時にはこれから学園祭までずっと女の下でこのを使われると思つと憂鬱な気分だった。

今までの経験上、役員をやるような女は口やかましくてろくな奴はない。

何も好きこのんで面倒な役目を引き受けたるなんて奇特なやつだと、そう思つていた。

週一回、水曜日の昼休みを準備のための会議にとられることが自体、面倒でたまらなかつた。決まりきつた規則の確認や連絡と報告に費やす時間に嫌気がさしそうな予感がした。

施設管理局（正式には施設設備品管理局）にはもうひとり一年生の男がいた。

管弦楽部の龍村功といつて、黒ぶち眼鏡をかけた眉の短い吊り目の小太りの男で、一目で話が合わなさそだと浅倉は決めつけた。深町が体育会本部役員と打ち合わせのため、妙に甲高い早口でしゃべる龍村から仕事のあらましを聞くことになつた。

対面で座り書類をはさんで説明がすすむうちに、性格は合わなさそうだが要領はいいと理解した。これなら初めに心配していたほど嫌な仕事にはならないだろうとほつとした。

すぐあとでわかつたのだが、龍村は一年次からこの仕事をしていた。

三年生で茶道部長の深町がこの四月から立候補で本部役員になつたため、局長は辞退したらしい。やな女、とまでは思わなかつたが意外な感じがした。

二年生の局長は他にもいたし、まさか大学で年功序列はないだろう。

この場合、その逆か。わからんと思い、浅倉はすぐにそれを忘れた。

ともかく、龍村の「う」と聞いておけば間違いない。

体育会の男と話す深町の背中は小さくて、先生の説明を受ける生真面目な中学生のように見えた。

最初の会議が終わつて、浅倉は各部から回収した提出書類を深町の机においた。すぐさま部室に引き上げて、新曲の練習をしたかつた。黙つて置いた書類を、深町はどうもありがとうと言つてもち上げて角をそろえた。

そして一枚とつて、左手をあげた。

「待つて、アサクラ君」

「はい？」

ポケットに手を突っ込んだまま踵を返してふりかえる。

彼女の着たメタリックブルーの本部役員用ジャンパーの左肩には「深町」と漢字で書いてある。そのときまで、浅倉は彼女の下の名前を一度も耳にしたことがないかったことにさえ気がつかなかった。

「悪いけどこの書類、もう一度部長の酒井くんに持つてつて書きかえてもらつてくれるかな。部室、戻るんでしょう？」

浅倉は椅子に座つたままの彼女のハート型の顔を見おろした。そのときには顔は好みなのだと、とうに気づいていた。

「時間が長すぎるの。いくら要望の段階でもこれはちょっと非常識すぎるわ」

希望使用時間は去年と同じ、午後四時から花火のあがる直前までのロングラン。ただし、事実上はその後も音は出し続けてダンパに流れ込む。それがもう伝統のようになつていて、浅倉はだからただ事実をのみ告げた。まさか慣例が崩れるとは思つてもみなかつたのだ。

「でもこれ、毎年オレら軽音がオーラスなんですよ」

「うん。知つてゐる。でも、龍村くんとも話したんだけ、今年から公平を期して順番はくじ引きにしようかと思つてゐる。どこの部活だつて長く、いい時間帯に演奏したいものでしょ？」

いつもは講堂で発表する部活も交えて、一度ちゃんと希望をきてからやつたほうがいいと思うの。サークルと同好会のひとたちもそつとつてゐるし体育会の局長も賛成してくれたしね

「や、でも、それは

浅倉は慌てて反論しようとしたが、深町はそれを一顧だにせずなんでもないような顔つきで書類をさしだしてきた。

「とりあえずコレもつて、施設管理局長の深町がそう言つてましたつて、言つてみて。自分の部活だからさやくにやり辛いと思

うけど」

そこまでわかつていてどうして、といふ気持ちが顔に出たのだろう。深町は彼の顔を見あげて口にした。

「アサクラ君、まずは当たり前の正論でいってみるの。しかも、下のひとから伝言つて形でね。さいしょから私が出てくとお互い引っ越しつかないでしょ？ 後がないんだから。お願ひね」

とびきりの笑顔できちんと両手でさしされ、浅倉はわけもわからずにその書類を受け取つてしまつていた。お仕着せのジャンパーが大きすぎ、指先以外ほとんど隠れていたことまで覚えている。

その後の顛末はどうでもいい。今となつては、たかが学園祭の舞台のことがなんであんなに大事だつたのかよくわからない。

けつときよく彼は学園祭でもバンドでもなく、深町姫香に夢中になつていた。

彼女は会議の席で質問にこたえるのにこれ以上ないくらいにテキパキと流れるように話していたかと思うと、施設管理室に戻ったとたん、時間が押してんだから何度も説明させるなよ、説明書ちゃんと読め！ と叫ぶほどめっぽう口が悪かった。

けれども、あとで聞きに来たひとには自分の昼休みがなくなるのも気にせず懇切丁寧に説明をした。編集局員のくせに施設管理室に入り浸る茶道部の後輩の来須美奈子が心配して、サンドイッチを買いに走ることもあつたくらいだ。

常にマイペースの龍村でさえ、深町がヤルと言つたことには、また無理ばっかいつてどうなつても知りませんよ、と口にしながらも従つていた。

浅倉は、いちど素直にいうことをきいてしまつたせいか使われっぱなしだった。

あのちょっと先の尖つた、いかにも脆そうな三角形の願にいよいよ振り回された。バイト先の中華屋の店長も部長の酒井も人使いが荒いと思っていたが、深町も堂々、負けていなかつた。

彼女の命令で混沌としていた施設管理室の備品はきちんと一個一個にラベルが貼られて整理整頓され、作業スペースさえ設けられた。今まで会議室を利用していた文化会編集局はそこで発行紙を綴じるようになり、何故かは知らないが深町はもちろん浅倉や龍村も手伝わされた。

わら半紙を折つて置んでまとめてホッチキスで留める作業の間、各自順番に好きな音楽をかけていいことになりCDやカセットを持ち寄つた。

そこでわかつたのだが、ふたりの音楽の趣味は一部かぶつていた。三年前の同じ日に、武道館で右手の拳を突き上げていたことまで打ち明けあつと、彼はすでに運命を確信していた。

カラオケでステイーブン・タイラーの物真似をした浅倉を、ほとんど尊敬の目で見あげていた深町。ロックスターがギターを弾くのは女の子にもてたいためだという真実を、浅倉は思い知つたところだった。

告白は、花火の打ちあがる瞬間に決めた。

どこの学校にもあたりまえに存在し、うそかほんとかわからない迷信ながら強固に信じられている伝説があるものだ。その時その場所で告白したカップルは、というやつ。

バカだったのだ。

浅倉は自分のことをつねにバカだと思っていたはずだが、そのときの自分ほど愚かなヤツはこの世にいまいと今は思う。

充分に予想できて然るべきことだが、学園祭当日の実行委員くらい忙しい者はいない。

しかも施設管理局の最大の仕事は撤収にこそある。花火なんて見るヒマはない。

トランシーバーを持たされながら昼は警備で混雑の整理をし、夕方からは立て看板を崩しテントをたたみゴミを集め、中庭の舞台を壊し始めた瞬間に、花火があがつた。

出遅れたと思ったが、深町はすぐそばにいた。

すっかり葉の落ちた桜の木の下で彼女は花火を見る余裕すらなく、ふくれあがつたゴミ袋の口を縛ろうと腕をついて体重を乗せたり肘で押さえたりしてようやく口を結び終えたが、今度はその黒いゴミ袋を箱からもちあげるのに難儀していた。

浅倉はなにかの競技でも日にするような気持ちで眉を寄せた生真面目な横顔を見つめていたが、さすがに自分の立場を思い出しうんカチの柄をジーンズの尻ポケットに突っ込んだ。

「センパイ、それ重いっしょ。運びますよ」

「ありがとう」

彼女は息をついてそこでやつと顔をあげた。

花火を見るにはまだ少し空は明るかったが、中庭は中央棟とカブエテラスの間にあり木々にかこまれた橢円形の広場になつていて、ひとつだけある電灯は真下にあるこげ茶色のベンチを照らすだけで、二人のまわりには闇が濃く落ちているようだった。

彼女の着るメタリックブルーのジャンパーがひどく浮いて見えた。平らな空き地を取り囲む低い木々のほとんどが桜だと気づいた浅倉は、入学式の日に新入生勧誘の声を聞きながらじつた返すメインストリートを歩き、ふと横を見たときにここが濃い緑のむこうに花の色を隠していたのを思い出した。

あの時、足をとめて庭に入つてみようと思わなかつたのはどうしてかわからない。

来須はこの中庭で、桜吹雪の下で彼女に逢つたのだという。

そんなドラマみたいな、と突つ込むのも忘れ、浅倉はたしかにあの日は風が強かつたとこたえ、自分が見たはずもない彼女の姿を思い描こうとしてやめた。

かわりに、そんなんだつたらいやでも目を引くよなと口にするべく、

来須は真顔で、あれは忘れられない、と追い討ちをかけた。

桜が四月に満開になる場所にいることを改めて感じ、演出入りす
ぎだら、と誰にともなく文句を言いたい気分になった。

部長の深町のアイデアだといつていて、茶道部は他の部活のよ
うにメインストリートで机を出して歩いている新入生を呼びとめる
のではなく、ここでお茶を點てて、デモンストレーションしたらしい。
やるとなつたら徹底してやらないと氣がすまない彼女らしい、思
いきつたやり方だと思った。

それを聞いた頃はどこから涌いてきたのかと不思議になるほど毛
虫がうようよしてたつとしたし、このあたりで昼を食べる奴の氣が
知れないと思っていた。

そのくせ、彼女が水曜日の昼に中央棟から中庭を通つて文化棟に
来るのを知つてからは、一限がすぐそばの一棟の一階なのをいいこ
とにベンチに座つて待つたりした。

つらつらとそんなことを思い出していたすぐ横で、

「今年は何発あがるかな」

と期待をこめた声で深町がつぶやいた。

彼女は小さなあごをそらすようにして空を仰いでいた。まるで花火ではなく、なにか motifs と遠くにある美しい星でものぞむような横顔だった。

思わず見惚れてしまった彼はこたえを返すのが遅れた。たしか準備のときの説明で何発と聞いた気がするがどうさには正確な数を思い出せなかつた。

しまつた。点数を稼げるところだつたのに。

そう思つてひそかに浅倉は焦つたが、深町は彼のこたえが返らないうことなどまるで気にしていないようすでまだ空を見つめている。

それは、こどもが何かを待ち望むときの純真な顔つきだった。

だからそれに合わせて彼もつぶやいた。

「はじめて見るけど、秋の花火もいいもんですね」

「そうだね」

頷きもせず同意した深町を浅倉は息をつめて見つめた。

いま彼女は隣に浅倉がいることになんの緊張もしていない。ぐぐ自然に受け止めている。

よし。ここだ。

持ち場があるせいか、いつも彼女にひつひつしている来須もいなかつた。来須には悪いけど、今がチャンスだ。

カフェテラスから流れる曲はエアロスマニスの『ドリーム・オン』。

ちょっと景気は悪いが彼女の好きなエアロの名曲だ。

いけ、ここだ、ここで言つてしまえ。

浅倉は何度もイメージトレーニングしてきた言葉をのぼらせた。

「来年も、一緒に花火を見たいですね」

「来年はどうかなあ。今のところ、四年は卒論と就職活動があるから学祭に参加しないつもりなんだよねえ」

「ここまでボケられるとは思っていなかつた。」

察しのいい深町のことだからイエスノーでくると踏んでいたのだ。

浅倉はうつむいた。

「や、そういう意味じゃなくつて、その、センパイと二人だけで……」

そこまで口にしたとたん、深町の身体が急にこわばつた。そして、軍手をしたまま両手で、顔を覆つ。

「うそ、ほんとに……」

細い、聞こえないくらいの掠れ声。

「え、あ、オレ?」

「アサクラ君、あのね、私がつきり知つてると思つてたから、その……」

「いつでも、なんでも、物事を『まかしたり言つてよどんだりしたことのない深町が今、はじめて俯いて視線をずらしている。ずらすどころか、落ち着かない様子で目を彷徨わせ、何かを否定するようこまるで震えているみたいに小刻みに頭をゆらしていた。」

浅倉は、こんなときなのに、その富士額がかわいいなどと思つて、余裕もあつた。

「センパイ?」

「……私が酒井くんと付き合つてゐるの……」

泣き声に近かつたと思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7534z/>

夢詩壺

2012年1月10日20時46分発行